

## メキシコ共産党と片山潜

竹内, 太郎

九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻 : 博士3年

<https://doi.org/10.15017/1792172>

---

出版情報 : 決断科学. 2, pp. 46-53, 2016-12-31. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター  
バージョン :  
権利関係 :

# メキシコ共産党と片山潜

竹内 太郎

日本近代史・日本思想史

はじめに

片山潜（1859―1933）は、日本の社会主義者、マルクス主義思想家であり、労働運動家としても知られている。1901年には日本初の社会主義政党である社会民主党に幸徳秋水（1871―1911）とともに入党した。1906年、安部磯雄（1865―1949）や幸徳とともに日本社会党結党に参加するが、田添鉄二（1875―1908）や片山・阿部は議会政策論をとり、

アナルコ・サンデイカリズムの影響からゼネストによる直接行動論を主張した幸徳らと対立した。この当時の片

山は一社会主義者でしかなかったが、1917年のロシア革命によりマルクス・レーニン主義に目覚める。これにより、片山の思想的基盤が固まった。その後、コミンテルンの指揮により、アメリカに渡り共産党結党に尽力する。その後、メキシコ革命後の1921年にメキシコに渡っている。

彼の任務が、メキシコ共産党の結党に大きく影響していることは周知の事実であるが、アメリカ合衆国での活動に比べて、その内実は極めて不明瞭であった。彼の『自伝』（1949年）でもメキシコについては、ほぼ確認できない。先行研究をひとつ手に取ってみると、メキシ

コでの活動の大枠は描かれているものの、「彼の滞在の結果、メキシコでのボリシェヴィズムの目標が促進されたかどうかは、非常に疑わしい」<sup>※3</sup>となかなか手厳しい。

しかし、一次史料としてメキシコ滞在中の片山の書簡、草稿類が存在することが分かった。よって、それをもとに、片山がメキシコで為した仕事の軌跡を辿ることを本小稿の目的としたい。

## メキシコでの活動

コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシー（以下「エイジェンシー」）の中心としての片山のメキシコでの活動内容は、前述のように、これまで窺い知る機会が極めて少なかったが、宮崎大学の山内昭人の仕事により可能になった。山内は「在墨片山潜の書簡と草稿類、1921年」(『大原社会問題研究所雑誌』

No.506(2001.1)において、片山の在墨期の書簡及び草稿を詳細に示している。本稿では、これに従い、片山のメキシコでの活動を捉えていきたい。

まず、片山を中心としたエイジェンシーのメキシコでの目的は明確であった。片山が1922年にモスクワに宛てた書簡の中で確認出来る。

南北アメリカの共産主義運動は、最初にアメリカ帝国主義とその資本主義の打倒をめざすべきだと私は考える。メキシコや南アメリカ諸国における強い共産主義諸党がなければ、力強いアメリカ共産党によって指導されたアメリカ共産主義運動でさえ、アメリカ資本主義に激しく一撃をくらわすことはできないだろう。なぜならアメリカの資本主義と帝国主義はそれらの国々に広く基礎をおいてきているから。メキシコは中・南米への要所であり、南北アメリカの連結環である。コミンテルンは強いメキシコ共産党を必要とし、それをアメリカ資本主義的帝国主義に死の一撃をくらわすであろうアメリカン・

※3 H・カフリン「アジアの革命家 片山潜」pp.307

共産主義インターナショナル (American Communist International) の連結環とよむ。<sup>※4</sup>

片山は、メキシコにおいて、プロレタリア革命の実現を労働者に説き、メキシコ共産党の結党を目指したが、メキシコという地理的条件を重視していた。コミンテルンが敵視したのは、「資本主義的敵国主義」であり、その権化こそがアメリカ合衆国であった。メキシコは、そのアメリカと国境を接することで、最もその「野望」を撃ち得る存在であり、さらに言えば、南米へとその「魔の手」が伸びることを阻止し得る存在なのであった。

その片山の意思是、書簡や演説草稿に多分に表れている。「合衆国の私の同僚が補強要員を送ると約束したが、そうしてはいない。それで私が現在の状況下で多くをなすことは不可能である。けれども私は揺るがず、メキシコ

※4 片山潜“Moscow to The Members of Small Bureau of the ECCP” (1921.1.10) (山内昭人)「在墨片山潜の書簡と草稿類, 1921年」『大原社会問題研究所雑誌』No.506 p.67))

※5 片山潜“Mexico to Comrades in Moscow” (1921.5.26) (山内同前 p.37) この宛先は、メキシコでの片山の苦勞を窺う知人らに宛てられていた。実際、片山はメキシコで人員及び資金不足に悩まされていた。

落とさなければならぬ。我々の労働者仲間よ、もし我々が自らの奮闘と決意によって外国資本主義のくびきを振り落とさなければ、メキシコの政治的独立は将来危険にさらされかねない。この決意とそれにもとづく将来の行動が、メキシコ独立の来る百周年記念の最良の祝いである。――<sup>※7</sup>

片山がこのように、メキシコでの共産主義勢力の拡大とその政治的独立を結びつけて捉えるのには、彼なりの根拠を有していた。片山は、メキシコの政情を「いくらでもニューアンスの異なる党が指導者によって自らの特別な目的で形成されてきた。それ故、人民や労働者は党の責務とは何の関係もなく、すべてはそれぞれの党指導者と彼の副官によって運営されている」<sup>※8</sup>と捉えた。したがって、片山は、ブルジョアに対抗する手段として、

※7 片山潜“Centenary of Independence of Mexico What We need the Most” (山内同前 p.62) ※独日記録田 (1921.9.16) 前巻。

※8 片山潜“The Communist Party of Mexico and Its Problems” (1921.7.19) (山内同前 p.56)

政府がその傀儡であるアメリカ帝国主義との闘争に最善を尽くすつもりだ」。<sup>※5</sup>「我々の運動の即座の任務は、国内的に組織し、それを強化し、そして北、南、中央アメリカ共産主義諸党を一緒にして、南北アメリカ大陸のプロレタリア運動への最大の脅威であり絶えず成長しつつある強力な北アメリカ帝国主義に敵対する強力な革命的闘争期間へと導くことである」。<sup>※6</sup>

さらに片山は、メキシコ独立100周年に関してもこのように関連づけて語っている。

我々のメキシコ独立百周年を祝おう！しかし、それを祝うなおヨリ良い方法がある。我々の父祖たちは自らの奮闘と犠牲によって外国のくびきを振り落とし、我々に独立したメキシコを与えてくれた。この独立を無傷のままにしておくことが、我々自身の第一の責務である。否、それ以上がだ。我々はメキシコを支配しようとしている他国の帝国主義のような、いかなる種類のくびきも振り

※6 片山潜“To Congress of Socialist Party of Southeast of Mexico” (1921.8.1) (山内同前 p.59)

労働者により組織された強固な政党としての共産党の必要性を強く説いたのである。もちろん、それは片山だけの意思ではなく、コミンテルン自体の総意であった。

しかし、片山のメキシコでの活動は困難を極めたことも事実である。資金の問題や人員不足の問題もさることながら、当然、マルクス主義者に対する世界的な弾圧からも免れなければならなかった。書簡の中でも、「5月半ば我々の仕事に従事していた同志たちの逮捕と追放以来、我々の仕事はかなり困難な状況下にあることを認めなければならない。なぜなら私は身を隠し、二人のメキシコ人同志と仕事をしなければならなくなった」<sup>※9</sup>と語られている。片山は、もともとメキシコにあった、2つの対立する共産主義政党を統一することを目指していたが、それぞれの指導者の失脚によりその計画は破綻した。さらに、片山はこれらの政党の指導者がそれぞれアメリカ人とインド人という外国人だったことについても

※9 片山潜“Mexico D.F. Mexico to E.C. of Communist International” (1921.8.21) (山内同前 p.48)

いささか言及しており、その失敗の原因を、彼らが「メキシコのプロレタリアと親密な接触をもって」おらず、「いかにメキシコ共産党を組織するか実際わからず、以前に共産主義プロパガンダの経験もたなかった」ことだと指摘した。<sup>※10</sup>

さらに、片山はメキシコにおいてマルクス主義が発展していない事実直面し、彼の抱えている困難を次のように説明している。大きく分けて三点ある。

第一は、上述のように有能な指導者をもっていなかったことである。註8において引用したので、詳述は割愛する。

第二は、アナルコ・サンディカリズム<sup>※11</sup>の影響である。労働者はすでにこの思想を知っており、ある程度の影響を受けていると片山の目には映った。それゆえ、政党は否定されるのであった。しかし、メキシコはそれ以上に

※10 片山潜「The Communist Party of Mexico and Its Problems」(1921.7.19) [山内同前p.56]

※11 アナキズムの一支流。議会や政治運動には異を唱え、ゼネラル・ストライキなどの労働組合による「直接行動」で社会革命を実現することを目指した。近代日本では、幸徳秋水にはじまり、大杉栄がその旗手を担った。

根本方針は彼らに理解されていない」との問題点を示し、「しかし、このことは我々にそれを説く良い機会を与えている」とし、「労働者たちに既成の政党と我々共産党との間のちがいを示すことが、我々の主要な任務だ」と決意を示した。

第三は、アメリカやイギリスなどの「先進国」の労働者に比べて、メキシコ労働者の教育水準が低いことであつた。片山によれば、メキシコ労働者は、外国雇用主によって搾取、収奪されているが、それらと戦う術はともかく、それを疑うことすらしていないのであつた。片山は、これらを解決する術として、自ら壇上に立った。コミンテルンの代弁者としてではあるが、それでも片山を通してその言葉はメキシコのプロレタリアートに向けられたのである。その草稿には、学の無い労働者にも、比較的分かりやすく話そうとする片山の言葉を見出すことができる。

メキシコは現代文明にとって絶対必要なすべてのものの中で最も豊かな資源と無制限の富をもっている。にも

政治腐敗により政党政治自体が体を為していなかったと片山は見た。このように、メキシコの社会に問題があることは確かだが、自らの立場と対立するアナルコ・サンディカリズムの蔓延をそのままにすることはできなかった<sup>※12</sup>。また、片山によれば、アナルコ・サンディカリ

ズムに関する文献(クロポトキン、バクーニン、ブルードン等)の文献はメキシコでも廉価で入手可能であつた。それに対して、他の社会主義文献、さらに共産主義文献に関しては高価であつた。レーニンの『国家と革命』は3ペソしたという<sup>※13</sup>。片山は、「マルクスとエンゲルスはメキシコのプロレタリアによく知られず、アナルコ・サンディカリズムによって自分たちのために宣伝されており、それ故真のマルクス主義はこれまで全く知られてきていない。ロシア・ボリシェヴィキ革命は労働者と農民の中でよく知られているにもかかわらず、共産主義の

※12 1920年代の日本の思想界の一大論争として「アナ・ボル論争」(名論争)がある。アナルコ・サンディカリズムとボルシェヴィズム(マルクス主義)の間の思想・運動的論争である。

※13 「メキシコ・ユカタン州における農地改革(1915-16年)について」エネケン・アシエンダの債務労働者を中心に」(吉野達也 2009年)によると1917年のアシエンダ(大農園)の賃金が平均2ペソだった。

かかわらず、現実にはあなたがたは幸福でもなく健康でもなく、それから遠い。これこそ私があなたがたに二三の問題を問いたい理由である。なぜあなたがたの非常に多くが貧しく、半分飢え死にしかけ、多くが靴さえ履いていないのか。考えよ!あなたがたはそれらのおいしい食料や果物を生産している人々ではないのか。社会秩序の現在の配列に何か間違つたものがあると考えてないのか。それらはすべての国の労働者が考え、徹底的に議論しなければならぬ問題だ。あなたがたと私は是非ともそれらを解かなければならない!<sup>※14</sup>

そして演説は回を重ねる毎に、メキシコの労働者の実情や、ロシア革命、プロレタリアート独裁とソヴィエト・システムを詳述している。

しかし、片山の「熱意」とは反して、コミンテルンはアメリカ大陸での「作戦」の中止を決定する。片山は、8ヶ月生活したメキシコを後にし、ソヴィエトへと出発した。

※14 片山潜「Fellow workers of Mexico」(1921年4月) [山内同前pp.52-53]

## おわりに

本小稿は、片山がメキシコ共産党結党のために、熱心に活動していたという事実を少し示した。その他にも、機関誌の発刊やレーニンの翻訳なども少ない活動資金の中、行っていた。片山がマルクス主義「未開の地」であるメキシコで、あらゆる辛酸を舐めたことは想像に難くない。片山ら、マルクス主義者にとっても、彼の地は「新世界」であった。

1922年、メキシコにおいて共産党は禁止されたが、1936年に労働者の支持により、共産党の活動は合法化されるに至った。片山が直接関わったわけではないが、片山の蒔いた種は労働者たちに届いていたのであろう。1921年6月に、壇上で謳った「国際労働組合評議会メキシコ・ビューロー、万歳！革命的階級闘争および来る世界的社会革命、万歳！」<sup>※15</sup>の声は、確かに彼らに届いたということを確認して、わたくしの稿を結ぶ。

※15 片山潜『The Congress of the Mexican Federation of Labor [at] Orizaba』(1921.6.23) [中岡同前 p.54]

## 参考文献・史料

片山潜「自伝」、真理社、1949。

エ・カプリン、辻野功・高井寿美子・鈴木則子訳「アジアの革命家 片山潜」、合同出版、1973。

山内昭人「在墨片山潜の書簡と草稿類、1921年」『大原社会問題研究所雑誌』No.506(2001年)

吉野達也「メキシコ・ユカタン州における農地改革（1915-19年）について―エネケン・アシエンダの債務労働者を中心に―」『京都フテンアメリカ研究所紀要』9(2009年)



竹内太郎 たけうち たろう

九州大学地球社会統合科学府地域社会統合科学専攻博士3年 決断科学プログラム 人間モジュール

研究テーマは「沖縄の歴史家、思想家である伊波普猷と近代日本」。